

ベトナム農村部の基礎中学校における 授業改革に関する一考察 —「授業研究」を通じた教育実践の変容—

関口 洋平

(広島大学教育開発国際協力研究センター)

はじめに

近年、市場化やグローバル化が急速に進むなか、情報技術の発展と深化に伴って世界的な規模で人工知能(AI)が日常生活に浸透するようになっており、国ごとに程度の相違はあるものの、全体として社会の情報化が進められてきている。

こうした社会のありようの急激な変化は、当該国家・社会における次世代の育成を担う教育のあり方にも影響を及ぼしてきている。そうした例として日本では、2020年より初等・中等教育段階においてプログラミング教育が導入されるように、知識の詰め込みを主とする教育からの脱却をめざす教育改革が断行されることになっている。また、こうした教育の変動は、とりわけ画一的・国家統制的な教育の体制をその特徴としてきた社会主義国においてもあてはまる。これまで「1つのカリキュラム、1つの教科書」のもと画一的な教育体制を採ってきた社会主義国ベトナムは、2011年に「ベトナム教育の標準化・現代化・社会化・民主化そして国際化の方向に基づく根本的かつ全面的な刷新」(以下、「根本的かつ全面的な教育刷新」)の方針を打ち出し、管理運営、教育内容や授業方法、それから教員のあり方に至るまで広範にわたり抜本的な教育の改革をおこなうことをめざしている。また、この路線のもとで2020年から新たな普通教育カリキュラムが導入されることになっており、従来は国定制度のもと1種類の教科

書が用いられる教育体制が一貫して採られてきたが、あらたに検定制度を導入し複数の教科書が使用される教育体制へと転換が進められている。

新教育カリキュラムに代表されるベトナムの普通教育改革のなかで肝とされるのは、従来の「チョーク・アンド・トーク」に象徴される教員と教科書を中心とした教育実践を見直し、生徒の創造性や主体性を引き出すような授業方法の刷新と教員の専門性の向上であるとされる。特に注目すべき点として、ベトナムではこれらの政策が打ち出されるのに先立ち、国際機関や大学との協働のもとで教員の専門性や生徒による創造的・主体的な授業参加を図るため「授業研究(Nghiên cứu bài học)」が試験的に導入されてきた。具体的には2006年のJICAの協力によるバクザン省での授業研究の導入・実践や、ベトナムのカントー大学とミシガン州立大学との協働による授業研究の導入・実践などが挙げられる。また近年では、ハノイ国家大学教育大学と広島大学教育開発国際協力研究センター(以下、CICE)との協働により、ハノイ市郊外の農村部に位置するグエンチュク中学校⁽¹⁾において授業研究が導入されてきた。それでは、ベトナムの普通教育において授業方法の刷新や生徒の創造性、主体性が指向されるようになってきているなか、授業研究の導入は教員を取り巻く学校内の環境にいかなる影響を及ぼし、教育のありようはどのように変容してきているのだろうか。

ベトナムでは、前期中等教育は2009年からその完全普及がめざされてきており、高等教育に接続する中等教育の基礎的段階としてよりいっそう重要視されるようになってきている。こうしたことを背景に、ベトナムの中学校における教員のありようや授業方法について論じる先行研究には、ベトナム人の教育学研究者による研究を中心にすでに一定程度の蓄積がある。なかでも主要なものとして第1に、授業方法のあり方に関わるものとしてグエン・トゥイ・ホンは、ベトナムの中学校における授業方法の刷新に関する教員の意識と実態について明らかにするため、ハノイ市などの都市部やハティン省などの相対的に貧困な地域において現地調査をおこなっている (Nguyễn Thúy Hồng, 2010)。また、グエン・タイン・キェットとグエン・カック・フンは、ベトナム南部のバーリア・ブン・タウ省における中学校の管理幹部と教員を対象に、授業方法の刷新の必要性について質問紙調査を実施するとともに、政策提言をおこなっている (Nguyễn Thanh Kiệt, Nguyễn Khắc Hùng, 2018)。加えて、フォン・ディン・マンとブイ・ヴァン・ホアは、ベトナム南部のドンナイ省における中学校の教員や授業方法の状況を検討するため、県レベルの教育訓練室の行政官、中学校の管理幹部・教員を対象に聞き取りを通じた実態調査をおこなっている (Phùng Đình Mẫn, Bùi Văn Hòa, 2018)。これらの先行研究では総じて、授業方法の刷新の必要性が現場の教員によって認識されるようになってきていると指摘されているものの、教育の現状としては教科書の内容の読み聞かせを中心に「教員が教えー生徒が聞きとり記述し、模範のとおりにする」という授業方法が依然として採られていることが明らかにされている。

第2に、ベトナムにおける授業研究に関する先行研究をみると、関連する先行研究は極めて限定的であるものの、主要なもの

として津久井 (2019) によるバクザン省の小学校を中心とする授業研究の実践や、フォン・ティ・ホン・グェットらによるベトナム南部の僻地における小・中学校での授業研究の取り組みに関する研究を挙げることができる。とりわけ後者の研究では、「教員間の協働を通じた教員の専門性の向上」と「授業実践の改善を通じた生徒の学びの向上」を理念的な柱としてカントー大学の教員がミシガン州立大学の協力を受けて授業研究のモデルをベトナム南部ホウザン省の各学校に導入し、対象となった学校では全体として教員の専門的知識と授業方法に改善がみられたことや生徒の授業態度がより積極的になっていることなどを明らかにされている (Nhóm Tác Giả, 2010)。

このように先行研究では、ベトナムの中学校における授業方法の刷新の方策として授業研究の実践について検討した研究自体が極めて限定的であり、近年の教育改革や教員のありようを規定する制度枠組みと関連づけながら体系的に検討しようとする研究はこれまで存在してこなかったと言ってよい。こうした状況から本稿では、ベトナムの中学校教員のありように影響を及ぼす制度的枠組みをふまえたうえで、ハノイ市ハータイ県のグエンチュク中学校を事例に授業研究の導入と実践の過程について分析することを通じて、ベトナム農村部の中学校において授業研究の実践がもたらす教育変容の特質を明らかにすることを目的とする。その際に本稿では、後述するようにグエンチュク中学校における授業研究の成功事例として、語文教科における授業研究の実践に着目して検討をおこなう⁽²⁾。

以上をふまえて本稿では、まず政策文書を手がかりに、授業方法の刷新をめざす中学校教員に関する制度的枠組みについて整理する (第1節)。次いで、グエンチュク中学校の従来の教育体制と授業研究の展開過程について検討する (第2節)。それから、

生徒による学びと教員による学びの2つの視点から、語文授業への授業観察に基づきグエンチュク中学校における授業研究を通じた学びの実態を明らかにする(第3節)。最後に、ベトナム農村部の中学校において授業研究の実践がもたらす教育変容の特質について考察する(第4節)。

1. 中学校教員をめぐる制度的枠組みの検討：政策文書の分析を中心に

それではまず、ベトナムの中学校教員に関する制度的枠組みについて検討することからはじめよう。次節以降において中学校の教育実態に切り込む前段階として、まずは前期中等教育を含むベトナムの普通教育の理念の方向性について確認する。2020年9月から施行される「教育カリキュラム」における教育目標を摘要すれば、それは「普通教育を通じて学習する知識の主人となり、学んだ知識や技能を暮らしのなかで効果的に運用し、生涯にわたり自ら学習することを理解する。多様な個性、人格、暮らしを尊重し、あらゆる社会関係を調和的に建設し、発展させることを理解する」こととされる(Bộ giáo dục và đào tạo, 2018)。

このように、ベトナムにおいて普通教育

の目標は生徒による生涯にわたる主体的な学びや知識・技術の運用に重心を置いている。新教育カリキュラムが形成される過程で2014年にベトナムの教育訓練部は、生徒の知識理解度を問う従来の授業のありかた(「内容アプローチ」)から、生徒の知識応用能力を問う新たな授業のありかた(「能力アプローチ」)への転換を図る新たな教育の方針を打ち出した。教育訓練部の資料をふまえて、教育方法に焦点をしばり「内容アプローチ」と「能力アプローチ」の特徴を示せば表1のようになる。

表1に示されるように、教育訓練部は「能力アプローチ」を通じて、ベトナムにおける普通教育を知識の伝達を中心に置く教育体制から、生徒自身による問題解決やコミュニケーション能力の向上を中心とする多様な学習形態を伴う教育体制へと転換していくことをめざしている。このことと関連して、近年ベトナムでは普通教育における授業方法の刷新を図るための政策が矢継ぎ早に打ち出されてきている。なかでもとりわけ主要な政策文書を挙げれば、それは2010年の「普通教育の各段階及び生涯教育における授業の上手な教員コンテスト条例」(以下、「教員コンテスト条例」)、2014年の「授業方法、検査、評価の刷新に関する専門的

(表1) ベトナムにおける「内容アプローチ」と「能力アプローチ」の対照表

	内容アプローチ	能力アプローチ
教育方法	教員は知識を伝達する主体であり、授業過程の中心に位置する。生徒は規定された知識を受動的に受け入れる。	教員は主として、生徒が自ら学び知識を積極的に習得するための手助けをする。問題解決やコミュニケーションを図るための能力開発を重視する。実験・実践的な授業の実施を重視する。
教育形式	授業のなかで軸となるのは、理論的な説明である。	多様な学習形式を取り入れるとともに、社会活動、課外活動、科学研究、創造的な実験を意識的に導入し、ICTの応用を促すようにする。

(出典) Nguyễn Ngọc Ngân, Ninh Anh Đại. “Dạy học theo định hướng phát triển năng lực người học trong phân môn Tập làm văn ở Tiểu học - bài học sư phạm.” *Tạp chí quản lý giáo dục*. tháng 7, 2018, pp.31-38 より筆者作成。

活動の指導」(以下、「授業方法の刷新指導」)、それから2018年の「普通教育機関における教員の職業基準規定」(以下、「教員の職業基準規定」)などである。

こうした一連の政策において共通しているのは、ベトナムの普通教育を教員による教科書の内容を説明する従来型の教育ないし「内容アプローチ」型の教育から、生徒の能動的な授業参加を重視し、創造的な授業をおこなう「能力アプローチ」によって特徴づけられる教育へと転換していくことである。加えて重要なのは、その際に教員同士がコミュニケーションをとることで授業方法の刷新のために積極的に意見交換を図っていくことが政策のねらいとされていることである。具体的に各政策の要点を挙げれば、次のようになるだろう。

第1に、2010年の「教員コンテスト条例」では、教員による授業方法の改善という観点から「授業の上手な教員」という称号を定め、学校級、県級、省・中央直轄市級の3段階のコンテストにおいて一定の評価を得た普通学校教員にこの称号を与えることが規定されている。試験内容は自身の授業経験や授業方法に関するアイデアの報告、教職専門性に関する試験問題、それから模擬授業であり、いずれの段階であっても「授業の上手な教員」の称号を得た教員は授業実践に関する経験を同僚と共有することが求められている。なおコンテストにおける模擬授業には、審査員である地方の教育行政官や教員、会場となる学校の参観教員と授業方法の共有をおこなうという意味もある(Thông tư số 21, 2010)。

第2に、2014年に「授業方法の刷新指導」が打ち出されて以降、ベトナムの中等教育機関では、生徒の主体的な学習能力の向上を図るため「各教科において主体的に内容を選択して授業専門課題を設計する」ことがめざされてきている。「授業専門課題」とは、いわゆる課題解決型学習に相当し、こ

の取り組みでは「①問題の発見、②解決方法の提示、③問題の解決」という過程のなかで生徒は他の生徒との議論や意見交換を通じて独自の結論に至ることが求められている。同時に、授業専門課題の設計を通じて教員には能動的な授業の方法や技術を身につけ、専門性を涵養することが期待されている(Công văn số 5555, 2014)。

そして第3に、2018年に公布された「教員の職業基準」は普通教育に従事する教員の専門性と業務能力の向上を図るとともに、教員の「品性」と専門性・業務能力を学校と教員自身が評価するための基礎を作り出すことを目的としている。本規定では、教員の「品性」とは仕事や任務に携わるうえで教員がもつべき思想として、「能力」とは教員の仕事や任務を実現するための可能性として定義され、15の指標それぞれに望ましい「品性」と「能力」が定められている。具体的に指標の1つである「教師の専門性の発展」では、教員個人の専門性の向上や主体的な研究活動の実施をはじめとして、同僚教員の指導や援助、自身の専門性向上に関する経験の共有などが評価項目に挙げられている(Thông tư số 20, 2018)。

こうしてみると、ベトナムでは多数の政策文書を通じて中学校における授業方法の刷新が教員に呼びかけられてきた。にもかかわらず、すでに先行研究の検討において指摘したように、現状としては多くの中学校において「チョーク・アンド・トーク」ないし「内容アプローチ」型の授業方法がとられているのである。それでは、グエンチュク中学校における授業研究の導入はこうした教育のありようにはいかなる変容をもたらしているのだろうか。

2. グエンチュク中学校における授業研究の導入と展開

本節では、ハータイ県の農村部に位置す

るグエンチュク中学校の概要と授業研究の導入と展開に関わる概況について検討する。

2.1. グエンチュク中学校の概要と従来の教育体制

本稿において事例校として検討するグエンチュク中学校は、ハノイ市から20キロほど離れた旧ハータイ省（現ハノイ市）タインオアイ県の中心部に位置する公立の中学校である。2018～2019年度において、同校には53人の教員に対して、小学校段階から数えて第6学年から第9学年に相当する4学年の818人の生徒が在籍している。タインオアイ県はその面積の多くが農村であるものの、近年徐々に都市化を進めてきており、同県には規模は小さいながらも運搬業、漆器製造業、材木・植林業等多くの有限会社が存在している。

グエンチュク中学校の管理運営において特に重要な組織は、校長を中心として学校の発展の方向性や方針を審議・決議する学校監督委員会であるが、後の議論との関係からここで指摘しておきたいのは、グエンチュク中学校には「授業や教育活動全般に関して教員の専門性を向上させるための組織」（中学校条例、第16条）として「専門班（Tổ chuyên môn）」が置かれていることである。同校の「専門班」は大きく「自然科学班」と「社会科学班」の2つからなり、該当する教科の教員が所属している。具体的に社会科学班についてみればそれは、語文、歴史、公民、外国語、体育、音楽の各教科の教員から構成されている。

また、授業研究を導入する以前のグエンチュク中学校における授業のあり方は、おおまかに先行研究で指摘されている「チョーク・アンド・トーク」に特徴づけられるものであったと言ってよい。そうしたこととして第1に、授業方法については、教員は教育訓練部が定めた統一的なカリキュラムをふまえ、各回の授業で何を、どこまで、

どのように教えるべきかが書かれた「授業設計書（Thiết kế bài học）」や各課のより詳細な教育内容が規定された「教員用教科書（Sách giáo viên）」を参考にしながら、こうした教科書の内容を読み上げることで生徒の理解を促していた。

第2に、教員と生徒との関係については、生徒の積極的な授業への参加が求められておらず、生徒は教科書の内容についての教員による講義を聴くという一方的な知識の受容をおこなっていた。このように教員と生徒とのコミュニケーションは双方向のものではなく、授業時間外に教員が生徒の理解度を確かめるといったやりとりも非常に限定的であった。

そして第3に、授業を通じた教員同士の関係については、後で述べるように専門班の活動の1つとして『授業観察手帳』による評価を前提とした授業観察や、専門班の主任による班員である各教員への授業設計に関する指導や検査などはあるものの、授業方法・内容に関する教員同士の直接的なコミュニケーションの機会は極めて限定的であった。聞き取りによれば、専門班の役割はあくまで各教員が作成した教案に対する行政的な「検査」であり、教員は協働することなくひとりひとりが個別に教案の作成をおこなっていた⁽³⁾。

2.2. グエンチュク中学校における授業研究の導入

こうしたグエンチュク中学校の教育体制に対して、2017年にCICEはインドネシアをはじめとする開発途上国において導入してきた授業研究のモデルを導入することを決めた。同年10月2日にクインーンズランド大学から授業研究に関する専門家を招聘し、ハノイ国家大学教育大学（以下、教育大学）との協働のもとグエンチュク中学校において授業研究を導入するための計画が話し合われた。授業研究の導入にあたって

は、教育大学の提案を受けて同中学校が対象校に選定されるとともに、語文、生物、そして科学が対象科目となった。

授業研究の導入にあたり手掛かりとしたのは、佐藤学著『学校を改革する：学びの共同体の構想と実践（岩波ブックレット）』及び佐藤雅彰著『中学校における対話と協同：学びの共同体の実践』の2冊を基にベトナム語に訳出して2015年に出版された『学習共同体：学校の全面的な刷新のための教育モデル』である。その冒頭では、教育訓練部中等教育局副局長によりベトナムの学校においては生徒同士の学びにおける交流と教員間の専門性向上のための学習に対して関心が高まっていることが述べられ、従来の教育体制を刷新するための方策としてベトナムが授業研究に関心を抱いていることが示されている。そこでは後に述べるように、授業研究の実践を通じて、学校の内部から全体としての学校教育を改革することの意義が指摘されるとともに、ベトナムにおいて生徒の主体性、積極性、創造性のいっそうの発揮を求める「根本的かつ全面的な教育刷新」を促進することが強調されている（Manabu Sato & Masaaki Sato, 2015）。そうではあるものの、授業研究の実践は従来の教育実践を変容させるため、グエンチュク中学校の校長は授業研究の導入に対して当初は難色を示し、地方の教育行政部門による行政的な指示が必要であると主張していたことを指摘しておく。

2.3. グエンチュク中学校における授業研究の展開

すでに述べたように、グエンチュク中学校において導入された授業研究は『学習共同体：学校の全面的な刷新のための教育モデル』で提唱される授業研究の理論を基軸としている。その要点は、①生徒間の学びの協同、②教員同士の授業観察と省察を通じた教員の専門性の向上、そして③生徒の

家族や地域社会による授業への参加という3つの柱を実現していくこととされる。これらの点を実現するために、グエンチュク中学校では授業研究を次のように周期的に繰り返して実践してきている。すなわち、対象となる教科において（1）授業研究を実施する教科書の内容に関する教案の設計会議、（2）教員間の授業観察を伴う授業の実施、（3）教員間での授業観察後の反省と意見の共有、それから（4）授業設計の改善と調整の4つである。また、語文の授業についてその工程をみれば、教育大学の教員がグエンチュク中学校を訪れて実施した授業研究は2017年11月16日を初日として同25日、1月25日、同26日というように、1カ月におよそ2回の頻度⁽⁴⁾で実施されてきた。また、グエンチュク中学校の教員のみによって実施された語文における教員同士の授業観察は1カ月に5回から6回の頻度で実施されてきている。

授業研究の取り組みを通じて、グエンチュク中学ではすでに一定の成果が表れており、それに伴い校長の授業研究への態度も肯定的なものへと変化している。具体的には第1に、教員間の授業方法の研究や改善を通じて、グエンチュク中学校語文教員のファム・ティ・フォン・ハイン女史（以下、ハイン女史）が2017～2018年度ハノイ市級の「授業の上手な教員」179人のなかに語文教科部門の教員として選出され、1等の称号を獲得した37人のうちの1人となった。第1節で述べたように、専門的知識に関わる試験に加えて、コンテストではハイン女史の模擬授業における多様な授業方法が評価されたものと推察される。

第2に、教育大学による語文の授業研究・チームによれば、授業研究の結果として大きく「授業における生徒の学習共同体と教職専門性の共同体の建設」が指摘できる。2018年9月3日に教育大学の授業研究の進捗状況に関する会議でティン・フォン・ファ

ム女史は「生徒の学習共同体」と「教職専門性の共同体」の2つの建設が進んでいると報告した。具体的には、語文の授業においてグループ内での生徒同士の対話や教員と生徒との対話が実現されてきていること、及び、授業観察後の教員間の意見の共有や省察が教員の専門性向上につながっていることが挙げられている（Nhóm Ngũ Văn-Trường ĐHGĐ, 2018）。

加えて第3に、これは授業研究の導入による直接的な成果として因果関係を指摘することはできないものの、教員と生徒間のコミュニケーションが積極的に図られてきていることも挙げておきたい。そうした例として、2018年9月5日にグエンチュク中学校において実施された3年生（第8学年）93人を対象としたアンケート調査では、「あなたは教員とよい関係にありますか」という問いに対して5段階評価で33人が5点（非常によい）を付けているし（平均は3.95）、「教員はあなたの学習進度を理解していると思いますか」という問いに対しては29人が5点（非常によく理解している）を付けている（平均は4.03）。このように、実態としても教員と生徒間の交流が活発に図られていることが示される。

なお、ベトナムでは現職の教員を対象とする研修制度が存在し、現職の中学校教員による研修への参加が規定されている。ハノイ市では、そうした研修のなかでも教育実践や教育方法の改善を目的とした研修がハノイ市教育訓練局の主導で実施されているが、これらは各中学校の管理幹部や経験豊かな教員など、ごく少数の教員を対象としているにすぎない⁽⁵⁾。この点からみても、授業研究は教員の専門性の向上を図るために該当科目を担当する教員全員を対象としているため、より包括的に学びの機会が提供されてきていることがわかる。

4. グエンチュク中学校の授業研究による「学び」の実態

本節では、第3節において展開した議論をふまえて、実態としてグエンチュク中学校ではいかなる「学び」がおこなわれているのかについて検討する。ここで言う「学び」とは、授業研究の導入に伴い教育大学の報告のなかで指摘された「生徒の学習共同体」と「教職専門性の共同体」の2つの「共同体」に基づいて、主として授業を通じた生徒による学びの場と、授業参加とその後の意見交換を通じた教員同士による学びの場の2つを含むものとする。

4.1. 授業方法の刷新と生徒の学びの実態

まずは、授業研究による語文の授業の実態について授業観察の結果をふまえて分析することで、授業方法のあり方と生徒の学びの変容について検討していこう。具体的には、授業研究の一環として教育大学の教員とともに筆者が授業観察を実施した2018年12月20日の語文の授業を手がかりに、その特質について検討する。

授業観察を実施した語文の授業は、中学1年生（6年生相当）の語文教科書における第65課「よい医師の条件はその人柄」を扱うものであり、これはホー・グエン・チュン（1374～1446年）による中世ベトナム黎朝の太医令についての物語である。具体的には、授業実践者の教員は60分の授業時間のなかで、王宮専属の医師として仕官していたファム・バンが重病の一般人の治療に向かうべきか、それとも風邪の治療を要求する王宮内の貴族の治療をおこなうべきかという点についてどちらを優先するのがよいかなど、複数の観点から生徒に思考を促すことを授業のねらいとしていた。

こうした授業の主題とも関わって、机は生徒が対面できるように「コの字」型に配列され、教科書の内容に基づきながらも参

加型の授業を実践するために多様な教育方法が採用されていた。授業の展開について簡潔に述べれば、以下の5点ようになる。

第1に、物語の内容について理解するため、最初に教員の指示のもとで複数の生徒による朗読がおこなわれた。それから、作者の情報について複数の生徒による紹介と教員によるプロジェクターを用いた紹介がなされた。作者の紹介においては、生徒が司会を務めていた。

第2に、物語の内容に関する質疑応答がおこなわれた。「太医令」という術語をはじめとした用語、歴史的な事実などについて教員が質問し、生徒がそれに解答した。その後も教員は質問をおこない、生徒は意見をそれぞれ述べながら授業が進められた。

第3に、現代のベトナムにおける医師についても生徒の理解を深めるため、中央血液学院の著名な研究者の退官式の様子を動画で視聴した。その後、生徒が自由に感想を述べる時間が与えられた。

第4に、授業の内容について感想を出し合うため、教員の指示のもとで二人一組になって議論がおこなわれた。加えて、教員は「作者がこの物語を作ったのはどのような理由からか」という質問を提示し、あらためていくつかのグループに生徒が割り振られたうえで、グループごとにリレー方式に基づき生徒が自由に答えを黒板に書いていく「競争」がおこなわれた。その間、生徒は「がんばって書こう」と合唱するように応援をしていた。

そして第5に、本物語に関する寸劇がおこなわれた。王宮を舞台として皇帝と太医令ファミ・バンを中心に4人の生徒が寸劇を演じ、それをもって授業は終了した。

このように、グエンチュク中学校において授業観察を実施した語文の授業では、全体として生徒は主体的かつ積極的に授業に参加していた。二人一組になる生徒同士の議論では、グループ編成が機能せずグルー

プに入れずに一人になっている生徒も見受けられたものの、本授業では物語の内容に関する質疑応答をはじめ、動画の視聴、グループでの討論、ブレイン・ストーミングに類するリレー方式の自由記述、それから寸劇など、多様な教育方法が取り入れられており、授業方法の刷新のための工夫がなされていたことがわかる。

こうした授業実践を①どのように創造的と言えるか、そして②生徒は何を学ぶのかという観点からみてみれば、前者①については、物語の作成理由に関して自由な解答が求められたり、寸劇を演じることで授業の一部分を生徒自らが作り上げたりする点で、生徒の主体性・創造性に基づく教育実践がおこなわれていた。また後者②については、生徒が歴史的な観点から太医令を主題とする文学作品について理解するのみならず、複数の視点から医者のあるようや責任のある生き方について学びきっかけが提示されていたと評価できる。

4.2. 授業の反省と意見共有を通じた教員の学びの実態

(1) 『授業観察手帳』による意見共有の特徴

次いで、グエンチュク中学校における授業観察や意見の共有など授業研究を通じた教員間での授業実践に関する学びの変容について検討していこう。

グエンチュク中学校において教員同士による授業観察と意見の共有自体は、授業研究を導入する以前から『授業観察手帳』を通じてすでにおこなわれてきた⁽⁶⁾。すなわち、グエンチュク中学校の専門班に所属する教員は、ハノイ市の教育訓練局によって配布された『授業観察手帳』所持し、授業観察をおこなった授業について「Ⅰ. 授業の進行に関する記述」、「Ⅱ. 観察と得られる経験」、それから「Ⅲ. 評価指標に基づく点数と成績」の3つの項目について記述したうえで教員同士で共有することが奨励さ

れてきたのである。このように『授業観察手帳』はグエンチュク中学校の教員同士の授業内容・方法の共有や、授業実践者である教員への授業評価の伝達がなされるように企図されている。

しかしながら、中央の教育行政部門である教育訓練部をはじめ省・中央直轄市レベルの教育訓練局は、現状では中学校における授業の質の改善を図るうえで『授業観察手帳』はうまく機能しておらず、その正確な使用を徹底するよう要請している⁽⁷⁾。こうした状況はグエンチュク中学校においてもあてはまる。以下では、グエンチュク中学校の語文教科の教員のなかでも最も影響力があると考えられるハイン女史の『授業観察手帳』を素材に、授業評価のあり方を分析する。なお、分析の対象期間は2017年10月12日から2018年5月5日であり、ハイン女史はこの期間で7人の語文教員による授業に合計で25回参加している。

まず、順番は逆になるが、「Ⅲ. 評価指標に基づく点数と成績」から総合評価についてみると、参加した25回の授業観察すべてにおいてハイン女史は4段階の評価（優、良、可、不可）のうち最高評価である「優」を各教員に付けている。

次に、「Ⅱ. 観察と得られる経験」からハイン女史の具体的な授業観察のコメントについて整理すれば、25回の授業観察におい

て頻出する観察コメントは表2のようにまとめることができる。

表2に示されるように、ハイン女史の『授業観察手帳』には授業観察のコメントは「適合した授業方法を使用」という評価をはじめとして定型かつ抽象的な表現が頻出しており、必ずしも教育内容と方法の関係にまで具体的に踏み込んだものとはなっていない。また、批判的な評価としては、「グループでの討論」の実施という授業方法についての提案にとどまっている。ハイン女史の授業観察の総合的な評価が一様に「優」であるように、『授業観察手帳』を通じた授業観察と意見はあくまで定型かつ肯定的なものに偏る傾向がある⁽⁸⁾。

(2) 授業研究による教員同士の直接的な意見交換

こうした従来の『授業観察手帳』を介した教員同士の意見交換の仕組みに加えて、グエンチュク中学校では授業研究の導入に伴って教員同士のより直接的な意見交換の場、ないし学びの場が確保されるようになってきている。ここでも2018年11月20日の語文の授業を手がかりに、筆者も参加した授業後の教員間の意見交換・リフレクションの実態について検討する。

具体的な意見交換の流れを示せば、次のようにまとめられる。中学1年生の語文教

(表2) ハイン女史の『授業観察手帳』における授業観察の結果

観察内容（肯定的評価）	記載回数
・（授業の目標・内容に）適合した授業方法を使用していた	18回
・情報通信技術を授業方法に応用できていた	14回
・入念に授業準備をおこなっていた	9回
・（授業において）知識を十分かつ正確に伝達していた	9回
・生徒は積極的、主体的、創造的に授業に参加していた	4回
観察内容（批判的評価）	記載回数
・グループでの討論をより積極的に実施するべきであった	6回

（出典）ファム・ティ・フォン・ハイン女史の『授業観察手帳』に基づき筆者作成。

科書第 65 課「よい医師の条件はその人柄」に関する授業が終わり、生徒が教室を出ていくのと入れ違いとなって、グエンチュク中学校及び教育大学の教員 10 人が教室に入った。「コの字」型の机の配置のままで意見交換が開始された。全体としての意見交換の時間は 30 分程度であり、ハイン女史を皮切りにして各参観者が意見を提示し、それに応じて授業実践者である教員はうなずいて理解を示しながら適宜返答していた。

こうした授業後の直接的な意見交換において特に強調する必要があるのは、参観者である各教員が授業内容や方法に対して肯定的な評価をするのみならず、授業改善のための批判的かつ建設的な意見も積極的に出していたことである。そうしたこととして例えば、ハイン女史は授業の評価点として「全体として授業はうまく流れているし、授業方法は大変面白いものとなっている」、「授業方法が多様であることもよいことであり、授業内容も評価できるものである」と評価した一方で、「授業の最後に実施した寸劇は合理的なものではなく、特に時間が短かった」、「生徒に提示する質問の論点をより明確にするべき」などのように改善点を指摘していた。また他の参観者の教員も、評価すべき点に加えて、「(二人一組に) グループ化した後の全体討論の時間が少ない」、「ビデオの視聴に関する説明が不十分である」といった建設的な意見を出していた。

このように、グエンチュク中学校での教員同士の直接的な意見交換は、参観者の教員がそれぞれ異なる見え方や捉え方を表明できる場となっており、授業実践者の教員が授業の改善を図るための学びの場としての役割を持つようになっているのである。

4. 考察

ここまでの検討をふまえて、ベトナムの中学校教員をめぐる制度的枠組みとグエン

チュク中学校における授業研究の実践についてあらためて整理しておけば、次のようになるだろう。第 1 に、グローバル化や情報化による社会変容を背景に、近年ベトナムでは学校教育において従来のような知識の暗記・復唱を主とする「内容アプローチ」から、知識を身につけそれを運用することを重視する「能力アプローチ」への転換が進められてきている。こうした背景のもとベトナムでは、「授業方法の刷新指導」や「教員の職業基準規定」など教員の授業刷新を促進する政策が次々と打ち出されてきており、中学校の教員には生徒が主体的に参加し創造的に知識の運用をおこなうような授業を実践すること、そしてそうした授業の経験を他の教員と共有するための交流を図ることが要求されるようになってきている。

第 2 に、しかしながら多くの中学校において授業実践の刷新がみられない現状に鑑み、ハノイ市ハータイ県の農村部に位置するグエンチュク中学校では CICE 及び教育大学との協働で 2017 年より授業研究を実践してきており、従来の「チョーク・アンド・トーク」型の教育実践の刷新が図られてきている。具体的に語文教科についてみれば、授業研究の実践過程において専門班員のハイン女史が 2017～2018 年度のハノイ市級「授業の上手な教員」の 1 等の称号を獲得したことが大きな成果として指摘される。また、教育大学の語文グループによる報告からは、授業中のグループ内での対話や教員と生徒との対話が実現してきていることや、授業後の教員間の意見の共有や省察が導入されてきたこともその成果として指摘されている。総じて、授業研究の導入を通じて、生徒同士及び教員同士のあいだで「学習共同体」が形成されつつあると言える。なお、授業研究の導入に当初は否定的であった校長も、2018 年 12 月現在はその成果を高く評価しており、授業研究を積極的に支援するようになっている。

そして第3に、「生徒の学習共同体」と「教職専門性の共同体」の2つの視点から授業観察を通じてグエンチュク中学校における学びの実態について検討すれば、以下のように2つの学びの変容を指摘することができる。1つ目として、ICTの使用やグループ形式での議論及び発表をはじめとして、教員が生徒同士のコミュニケーションを促すような座席配置のもとで教育方法の工夫や内容の選択を授業において実践していくことで、生徒が積極的、主体的に参加できる授業が実践されるようになってきている。2つ目として、授業後の意見の共有をおこなう仕組みとしては、従来は『授業観察手帳』を通じて定型的かつ肯定的な授業評価が実践されてきた。こうした仕組みに加えて、授業研究による省察の機会を設けることで授業参観者の教員や教育大学の教員が異なる意見を表明し、授業実践者の教員が授業をよりよいものに改善するための学びの場が生み出されてきているのである。こうしてみれば、授業にあたって教員同士が協働して教案を作成するようになっていたり、授業後に参観した教員同士が批判的・建設的な意見を出して授業方法の改善をめざすようになっていたりすることも、授業研究を通じた教員間ないしは専門班の機能の変化として挙げられる。

以上のことから、グエンチュク中学校における授業研究の実践は、近年ベトナムが政策文書を通じて要求してきた教員間の授業実践の共有を具体的に促進する現場レベルの「装置」としての機能をもっており、授業の設計と授業後の省察において教員同士の共同性ないし同僚性を高めることに寄与していることがわかる。こうした学校内部における環境の変化のなかで、教育のありようは全体として教員を中心とする説明型の授業から生徒による参加的・対話的な教育へと変容しつつある。こうしてみると、授業研究がもたらす教育変容の特質は、こ

れまでの教員から生徒への一方的な知識の伝達を主とするベトナムの中学校教育では希薄であった教員・生徒間のつながり、そして教員同士の授業実践を通じた共同性が生み出されると同時に、生徒同士及び教員同士のあいだで意見の多様性が担保される学びの場が作られる点である。グエンチュク中学校の語文の授業研究は、同校がハノイ市郊外の農村部にありながらもハイン女史がハノイ市級の「授業の上手な教員」として金賞を獲得した時点でベトナムの授業刷新をめざす改革の延長線上にあるのみならず、ハノイ市全体の中学校における語文教員のなかでもとりわけ質の高い教員を輩出した意味で高く評価されるものであろう。

最後に、持続可能な教育発展モデルという視点からベトナムの中学校における授業研究モデルの定着について付言しておきたい。授業研究という学びのシステムが他文化的土壌のなかで持続的に発展するためには時間を要するとされるが、その際に授業研究が持続可能なモデルとなるかどうかは校長が主導的な役割を果たせるかどうかであると指摘されている（秋田、2009）。グエンチュク中学校の場合でもこのことは当てはまる。同校では授業研究の展開の過程で校長の授業研究への態度は否定的なものから肯定的なものへと変化してきており、このことが授業研究の授業研究の実践を後押しする動力となってきた。教育大学の語文チームが報告するように、より持続的な授業研究の実践と教育実践の刷新を図るためには、校長を中心とする学校監督委員会が恒常的にクラスを訪問することで授業研究や学びの状況について把握し、授業研究をより活発化させることが必要なのである。

おわりに

本稿では、ベトナムの農村部の中学校における授業研究の導入が学校内の教員を取

り巻く環境や教育のありようにはいかなる影響を及ぼすのかという問題関心のもと、ハノイ市ハータイ県のグエンチュク中学校を事例として、授業研究の導入に伴う教育変容の特質について主として語文教科を中心に明らかにしてきた。本稿の検討からは、グエンチュク中学校では授業研究を通じて語文教科において生徒の主体的な参加や議論を促す授業方法が実践されることで生徒同士の共同的な学びの場が作られるようになるとともに、教員同士の間接的な意見交換の媒体である従来の『授業参加手帳』に加えて、直接的な意見交換と省察の機会が教員同士の学びの場として機能していることが明らかになった。

こうした授業研究の実践を通じて、グエンチュク中学校は「授業の上手な教員コンテスト」において省・直轄市レベルであるハノイ市級の「授業の上手な教員」を輩出しており、本授業研究のモデルは近隣の中学校のみならずハノイ市全体の中学校からも評価され、より多くの地域において伝播・普及する可能性を有していると言ってよい。実際としても、2020年1月現在同モデルはハノイ市郊外にあるフーミン中学校において同校校長、副校長の主導のもとで導入が進められているし、グエンチュク中学校やフーミン中学校など各中学校へのモデルの導入を推進している教育大学講師ドアン・ゲット・リン女史はベトナム政府直属の委員会 PLC (Professional Learning Community) の一員に任命され、ハノイ市に限らずベトナム全国レベルでの授業研究モデルの伝播・普及が検討されるようになってきている。このようにグエンチュク中学校の取り組みは1つの事例でありながら、授業研究に関するベトナムの教育政策にも影響を与えつつあることがわかる。ただし同時に、そもそも授業の方法を多様化させたり、生徒による議論の時間を増やしたりすることが教育の質的向上に直結するのかなど、

授業研究を通じて授業のあり方自体を問いつけることも重要であろう。

本稿で明らかにしたように、授業研究が理念として掲げる生徒や教員による共同体としての学びの場の形成は、おおまかにベトナムの教育改革の方向性と合致しているものである。ベトナムの中学校教育の改革の実態をより深く掘り下げるためには、中等教育段階の教員養成・研修制度の改革について検討するとともに、中学校を対象とする丹念な現地調査を進めることが肝要である。以上を今後の課題として、ベトナムの教育研究を進めていきたい。

注

- ⁽¹⁾ ベトナムの学校教育制度は5-4-3制を採っており、日本における中等学校はベトナムでは基礎中学校と呼ばれる。本稿では、基礎中学校を中学校と呼ぶことにする。
- ⁽²⁾ 本稿の意義は、ベトナムの中学校教育の制度や実態を明らかにするのみならず、授業研究としてはこれまで導入されることが少なかった語文教科(国語)について検討することである。
- ⁽³⁾ 2019年9月11日に筆者がグエンチュク中学校で実施した、ハイン女史をはじめとする語文教員に対する聞き取りによる。
- ⁽⁴⁾ 語文教科に対する授業研究の実施日を具体的に示せば、2017年10月5日(2回)、11月23日(1回)、12月5日(1回)、2018年1月5日(1回)、1月29日(1回)、2月1日(1回)、2月8日(1回)、3月15日(2回)のように続いている。
- ⁽⁵⁾ 2019年12月25日に筆者がハノイ国家大学外国語大学附属中学校で実施した、グエン・フエン・チャン副校長に対する聞き取りによる。
- ⁽⁶⁾ 原語は Sớ giáo dục và đào tạo. Sổ Dự Giờ. 表紙には携帯者の名前、専門班、学校名、県及び省の名称について記載する欄がある。
- ⁽⁷⁾ 次の URL より、最終アクセス (<https://giaoducthoidai.vn/trao-doi/can-coi-trong-cach-ghi-chep-oso-du-gio-1456774.html>)。

⁽⁸⁾ ハイン女史に限らず、ター・ティ・トゥ女史、チュー・ティ・ラン・フオン女史、チュオン・ティ・ティン女史など、多くの語文教員の『授業参加手帳』においても他の語文教員の授業に対する評価は管見の限り「優」であり、このことは全体的な傾向として指摘できる。

参考・引用文献

(邦文)

秋田喜代美 (2009) 「教師教育から教師の学習過程研究への転換：ミクロ教育実践研究への変貌」 矢野智司 (ほか) 編『変貌する教育学』世織書房。

津久井純 (2019) 「授業観察経験の比較文化研究：ベトナム人教師のナラティブ分析から」『これからの質的研究法：15の事例にみる学校教育実践研究』東京図書。

(越文)

Bộ giáo dục và đào tạo. Chương trình giáo dục phổ thông: Chương trình tổng thể (Ban hành kèm theo Thông tư số 32/ 2018 / TT-BGDĐT ngày 26 tháng 12 năm 2018 của Bộ giáo dục và đào tạo). Hà Nội, 2018.

Công văn số 5555 của Bộ giáo dục và đào tạo ngày 8 tháng 10 năm 2014 Về việc hướng dẫn sinh hoạt chuyên môn về đổi mới phương pháp dạy học và kiểm tra, đánh giá; tổ chức và quản lý các hoạt động chuyên môn của trường trung học/trung tâm giáo dục thường xuyên qua mạng.

Manabu Sato & Masaaki Sato (2015). *Cộng Đồng Học Tập: Mô hình đổi mới toàn diện nhà trường*. Hà Nội: Nhà xuất bản Đại Học Sư Phạm.

Nguyễn Ngọc Ngân, Ninh Anh Đại (2018). “Dạy học theo định hướng phát triển năng lực người học trong phân môn Tập làm văn ở Tiểu học - bài học sư phạm.” *Tạp chí quản lý giáo dục*. tháng 7, pp.31-38.

Nguyễn Thanh Kiệt, Nguyễn Khắc Hùng (2018). “Biện pháp quản lý của hiệu trưởng đối với việc đổi mới phương pháp dạy học ở các trường trung học cơ sở

Huyện Long Điền, Tỉnh Bà Rịa Vũng Tàu”. *Tạp chí quản lý giáo dục*. tháng 8, pp.93-99.

Nguyễn Thủy Hồng (2010). Thực trạng và giải pháp đổi mới phương pháp dạy học ở trường trung học cơ sở. *Tạp chí khoa học giáo dục*. tháng 4, pp.12-15.

Nhóm Ngữ Văn-Trường ĐHGĐ (2018). “Nghiên cứu bài học vì cộng đồng học tập trong dạy học ngữ văn ở trường THCS Nguyễn Trục, Hà Nội”(Tài liệu phát biểu). tháng 9.

Nhóm Tác Giả(Phùng Thị Nguyệt Hồng, Hồ Thị Thu Hồ, Bùi Lan Chi, và Wayne W., C.)(2010). Vận dụng mô hình nghiên cứu bài học vào dạy học ở tiểu học và trung học cơ sở: Kết quả nghiên cứu và bài học kinh nghiệm. *Tạp chí khoa học giáo dục*. tháng 10, pp.25-30.

Phùng Đình Mẫn, Bùi Văn Hòa (2018). “Phát triển đội ngũ giáo viên trung học cơ sở huyện thống nhất, tỉnh Đồng Nai”. *Tạp chí quản lý giáo dục*. tháng 6, pp.135-139.

Thông tư số 21 của Bộ trưởng của Bộ giáo dục và đào tạo ngày 20 tháng 7 năm 2010 Ban hành Điều lệ hội thi giáo viên dạy giỏi các cấp học phổ thông và giáo dục thường xuyên.

Thông tư số 20 của Bộ trưởng của Bộ giáo dục và đào tạo ngày 22 tháng 8 năm 2018 Ban hành Quy định chuẩn nghề nghiệp giáo viên cơ sở giáo dục phổ thông.

The Change of Educational Practice in a Junior High School in Rural Area of Vietnam

Yohei SEKIGUCHI

CICE, Hiroshima University

This paper clarifies the characteristics of educational change in a junior high school located in rural area in Vietnam, focusing on practice of “Lesson Study”, through multiple analysis of official policies about recent educational reforms on junior high schools in Vietnam and field study of the present situation in Nguyen Truc junior high school as a case study. In this paper, I will provide some viewpoints on how the practice of lesson study has affected school environments surrounding teachers in the school and how the practice of education has been changed in the course of practice of lesson study.

With intention to achieve this research object, in the first section, official policies related to reforms of educational practice in junior high schools in Vietnam. In the next section, the former style of educational practices and the course of development of lesson study in Nguyen Truc junior high school is examined as a case study. In the fourth section, based on the discussion of the second section, the present situation of educational practice and learning in Nguyen Truc junior high school is analyzed from the two aspects of students’ learning community and teachers’ learning community with special focus on literature class.

In the light of these points, it is concluded that lesson study in Nguyen Truc junior high school has contributed to enhance and strengthen collegiality of teachers though co-building lesson plans and co-reflecting on the classroom practices, and that educational practice has been changed from the one that is based on teacher-centered and “choke and talk” style to the one that is based on participation and dialogue between students. In other words, the characteristic of educational change by introduction of lesson study in Nguyen Truc junior high school is to create connections between teachers and students and collegiality of teachers in classroom practice as well as to create learning condition that can guarantee various opinions in these communities.